

ティラノサウルスがダンスのごとく。シヨベルカーが見る見るうちに数棟の古い家を打ち壊した。昨春秋、我が家の真ん前でのこと。

大口を開けてうなり襲い掛かる鉄塊怪獣。鷲掴みにし、引き剥がし、押しつぶす。瓦の下の葺き土や土壁が粉塵をあげ崩れ落ちる。かみ付かれたトタンはバリバリとひしゃげ、柱や梁は軋み悲鳴をあげる。抵抗する庭石を持ち上げ、庭木を根から引っこ抜く。

かつて手触りに満ちたものは残骸と化し、次々とトラックが運び去る。その虚しさの一方で、埃まみれの年配作業員には頭が下がる。彼らもまた、安堵と疲れを肩に家に帰って行く。そして、平らに整地された茶色の土だけが残った。ボーンと見やる寂寞とし

た跡地。すると、2匹のモ

ンシロチョウが絡み合いながら現れ、むき出しの地べたに止まったのだ。夕日に白い翅を光らせ、在ったものを鎮魂するかのよう

に。僕が住むのは、昔からの静かな住宅街に立つ古屋だ。2階のアトリエは北側に広い窓と天窗があり、柔らかな光を取り込む理想的

消えゆくもの

なつくりになっている。

窓から遠く正面には、セザンヌの描くサント・ヴィクトワール山を思わせる800呎ほどの独立峰、泉ヶ森。街の中央に座す城山の緑深い原生林も近くに見える。眼下にあるのは瓦屋根の古い質素な家々。僕はその何でもない一角を、密かに宇和島の名所だと親しん

できた。

同じ場所で40年間絵を描き続ける中で、これらが混然一体となった見晴らしに、どれだけ心休められたか。それが遠景だけを残り呆気なく消え、無味乾燥な駐車場に姿貌した。仕方ないと言えはそうだ。時の流れと



言えはそうだ。それにしても残念。常の目の置き所が欠けてしまった。

近所、という存在。僕はほとんど付き合いはなく、軽く会釈するくらいだが、ちょっとした暮らしが、目に入ってきた。水やりや洗濯物干し。庭先で何やら

手作りする様子。聞き慣れた足音や飼猫の動き。「いい天気ですね」と声を掛け合う人たち。目に見える日常というもの。

この場所で受け継がれた悲喜もごもの暮らしの歴史。産まれ、育ち、抛りどころとしながらも出て行った人。離れず、老いとともに施設に入った人。亡くなったと耳に入る噂。そして住む人が途絶え、役目を終えた家だけが残っていた。

誰よりも日々目にした人たち。どんな風景よりも身近にあった家々。ここに暮らしたひとりひとりの一生は重くとも、軽々と消えてゆく。無常ということ。しかし、かしました、それは生からの解放でもあるのだろうか。ティラノサウルスは今日もどこかで踊り続ける。

(吉田 淳治・画家)